

## 現地レポート／浅見 恵理（文化科学研究科 比較文化学専攻）

派遣先：ペルー共和国

派遣先機関名：国立フェデリコ・ビジャリアル大学

派遣期間：2009年7月14日～2009年11月30日

### 2009年11月20日報告分

#### 授業・研究の進捗状況

クーヨ遺跡の発掘調査は11月17日で終了した。調査終了前にはペルー文化庁の視察を受け、発掘調査の経過や現況の説明、出土遺物に関する概要を報告した。また国立フェデリコ・ビジャリアル大学の教員が発掘調査の現場を訪問し、意見交換を行った。さらに友人・知人の訪問を受け、調査成果の概要を説明するとともに彼らからも有益な情報を得ることができた。調査終了後は、図面整理と出土遺物の整理作業を行っている。土器洗いの作業を開始し、おおまかな土器形式の把握に努めている。

#### 生活関連状況

チャンカイ谷の上流域では雨期が本格的に開始したため、チャンカイ川が増幅し、水質もだいぶ濁ってきた。発掘調査中も時々大雨が降り、作業を一時中断しなければならない日もある。また、クーヨ地域では生産されているリンゴの収穫期となり、人の動きが活発化している。外部からの人の流れも多くなり、調査機材の管理や身辺には十分な注意が必要となっている。

#### その他報告すべき事項

発掘調査が終了したため、滞在先は遺跡付近のサウメからワラル市に戻った。連絡手段として、携帯電話とインターネットの利用が可能となった。

### 2009年10月11日報告分

#### 授業・研究の進捗状況

クーヨ遺跡の発掘調査を開始して4週間が経過した。基壇状構造物と部屋状構造物を対象に掘り下げを行っている。基壇状構造物に関しては、少なくとも3つの建築時期が確認できる。出土遺物から推測して、最後の建築時期は後期ホライズン（紀元後15世紀前半～16世紀前半）にあたり、それより古い時期は後期中間期（紀元後1000～1470年）に属するようである。部屋状構造物に関しては2つの建築時期が推測され、時期により部屋の入り口を封鎖してアクセスを制限していることが明らかである。しかし出土遺物が少なく、各部屋状構造物の建築時期の特定とその関係性は不明である。

#### 生活関連状況

発掘調査を実施しているクーヨ遺跡はチャンカイ谷の中流域（標高約500m）に位置しており、この地域は6月から9月にかけてロマスと称される濃い霧が発生する。これまでは日中でも霧が発生し寒い日が続いていたが、9月23日の春分

の日を境に太陽が強く照りつける日が多くなった。日中の気温は約25度であるが乾燥して土埃が舞うため、発掘作業中の水分補給とマスク着用、また日焼け止め対策が必須となっている。また季節の変わり目で寒暖の差が大きく、ペルー人の作業員や滞在している家の住人が風邪を引き、かなり長引いている状況である。新型インフルエンザではないとのことだが、新型インフルエンザおよび風邪予防対策として、これまでと同様にうがいと手洗いを励行している。

### その他報告すべき事項

引き続き発掘調査の期間中は、遺跡付近のサウメ地域に居住する予定である。連絡手段として、携帯電話の利用は可能であるが、インターネットの利用は週に一度ワラル市に下りてきてメールを確認する程度である。

## 2009年9月20日報告分

### 授業・研究の進捗状況

発掘調査対象遺跡に関する資料収集を行うとともに、遺跡周辺の踏査を行った。その結果、現在まで知られていた範囲外にも遺構が広がることが明らかになった。この作業と平行して、調査拠点となる滞り場所や調査機材の保管場所を確保するため地元住民に相談し、一軒家を間借りすることができた。また、実際に発掘作業を行う作業員を雇うため、周辺地域の住民と交渉を行い作業内容の合意にいたった。8月下旬にペルー文化庁から発掘調査許可が下りたため、9月14日から発掘調査を開始した。

### 生活関連状況

現地通貨（ソル）の対米ドル為替相場は、ソル高ドル安の傾向にある。7月14日時点では1ドル3.0ソールだったのが、9月19日時点で1ドル2.88ソールまでになっている。現地住民の予想では、年末に向けてドルが回復するとみられている。

新型インフルエンザの情報に関しては、ペルー保健省によると、全国的に感染が拡大している状態であるが、感染者の減少傾向の見られる地域もあるという。現在まで死者数は98人、感染者数は6961人に上る。ワラル市ではこれまで感染者の存在は確認されていないが、感染予防のため手洗いとうがいは励行している。

### その他報告すべき事項

本格的な発掘調査の開始にともない、遺跡付近のサウメ地域に拠点を構え、調査参加者と共同生活を送っている。本地域はインフラ整備が遅れており、電気・水道設備が整っていない。滞在している家はモーターで自家発電を行っている状態である。そのため、携帯電話の利用は可能であるが、インターネットでの連絡は、週末にワラル市に下りてきてメールを確認する程度である。

## 2009年8月20日報告分

### 授業・研究の進捗状況

発掘調査の準備のためフェデリコ・ビジャリアル大学を訪問し、考古学者オドン・ロサーレス・ワトゥコ教授と情報交換および調査内容の調整を行った。また、調査に参加予定の同大学卒業生および専攻の学生との打ち合わせと情報・意見交換を行った。さらにペルー文化庁を訪問し、申請中である発掘調査の許可に関して担当者から情報を得るとともに、調査

対象遺跡に関する資料収集をしている。上記の作業と平行して7月下旬からは調査地であるワラル市に拠点を移し、現地の状況把握および遺跡踏査を行っている。特に、ワラル市長と文化財担当者および遺跡の所在地であるクーヨ村の村長と面会をして調査への理解を得ながら発掘調査の準備を進めている。

### 生活関連状況

現在、ペルーの海岸地域は雨期であり、ワラルではガルアと呼ばれる濃霧が発生している。その上、世界的な気候変動を受けて、最近では霧ではなく弱い雨が一晩中降ることも多く、例年に比べて気温の低下が著しい日もある。新型インフルエンザの影響に関しては、リマ等の都市部に感染者が集中していたが、今はペルー国内のほぼ全域に感染が拡大している状態である。ペルー保健省によると、現在まで死者数は62人、感染者数は6121人に上る。ワラルでは特に感染者の存在は確認されていないが、感染予防のため手洗いとうがいは励行している。

### その他報告すべき事項

8月下旬以降は本格的な発掘調査を行う予定である。発掘調査は調査参加者との共同作業によって成り立つため、彼らとの共同生活が必須となる。そのため、ワラル市内の現在所とは異なる場所に拠点を移す予定である。連絡手段は、引き続きインターネットおよび携帯電話が利用可能である。